

分娩誘発・促進について

お母さんが妊娠すると、赤ちゃんは約 40 週間かけてお母さんの胎内で育ち、母児ともに出産の準備ができると生まれてきます。お母さんのからだでは、出産の準備ができるとホルモンなどの物質が自然にからだの中で分泌されて子宮を収縮させ、出産のための「陣痛」を起こします。

しかし時々、出産のための陣痛がうまく起こらなかったり、お母さんや赤ちゃんの状態によって、通常のお産の進行を待たずに出産した方が良い場合があります。このような場合は陣痛促進剤を使って出産を促したり、帝王切開を行うことがあります。

分娩開始前（10 分毎の陣痛が分娩の始まりです）に陣痛促進剤により分娩を進めることを分娩誘発といい、すでに分娩は開始しているが、陣痛が弱く、分娩をスムーズに進めるために陣痛促進剤を用いる場合を分娩促進といいます。

陣痛促進剤をいわれるくすりは、生体の中で自然に分泌されるホルモンの様な物質を化学的に合成したもので、子宮の筋肉を収縮させて、陣痛を起こりやすくさせたり促進させたりします。

・くすりの種類と使い方

現在使われている陣痛促進剤にはオキシトシンやプロスタグランジンがあります。オキシトシンは注射剤（点滴静脈注射）でプロスタグランジンには注射剤（点滴静脈注射）と経口剤があります。

【経口剤】プロスタグランジン E₂

錠剤で 1 時間に 1 錠ずつ、最高 6 錠まで服用します。その間に陣痛が強くなったら服用を止め様子をみます。場合によっては注射剤（点滴静脈注射）に切り替えることもあります。

【注射剤】オキシトシン、プロスタグランジン F₂ α

必ず点滴静脈注射で行います。お母さんと赤ちゃんの状態を確認しながら点滴する速度を調節します。

これらのくすりは、同時に複数の種類が使われることはありませんが、お母さんと赤ちゃんの状態をみて、他のくすりに切り替えることはありますので、前後して使われることはあります。また、陣痛促進剤を使用する場合は必ず分娩監視装置により、赤ちゃんの心音や子宮収縮の状態をモニターしてお母さんと赤ちゃんの状態をみながら、安全性に十分配慮しながら使用します。

なお、子宮の入り口（子宮頸管）が硬く、分娩の準備が整っていない場合は小さな風船（ミニメトロ[®]、生理食塩水を 40ml 注入）をあらかじめ頸管内に留置する場合があります。

・このくすりが必要な場合は？

このくすりは、次のような場合に使われます。このくすりを使うことにより、自然な分娩に近い形で出産が進み、帝王切開を行わないで済むことがあります。

-前期破水を起こした場合

まだ、陣痛がないのに破水してしまった場合（前期破水）、そのまま放置すると、子宮の中で赤ちゃんがいろいろな菌に感染することがあり、またお母さんのからだにも良くありません。

-お母さんに妊娠の異常（妊娠高血圧症候群など）や合併症がある場合

妊娠を継続させることによりお母さんや赤ちゃんに悪い影響が出る場合があります。この場合は早めに出産を考えたほうが良い場合があります。

-子宮内の赤ちゃんの状態がよくない場合

赤ちゃんの発育が悪い場合やなんらかの病気がある場合には妊娠を継続することが赤ちゃんにとって危険な場合があります。

-予定日超過の場合

分娩予定日を過ぎると胎盤の働きも低下して赤ちゃんに十分な酸素供給が難しくなる場合があります、42週以降の過期産を避けるために分娩誘発が必要になります。

-無痛分娩（硬膜外鎮痛法）の場合

無痛分娩を希望される場合には39～40週ごろに分娩を誘発します。

・このくすりを使った場合の危険性は？

くすりというものは、一人一人、効き目の現れ方が違うものです。少しの量で効き目が表れる人もいれば、少し多く使っても効き目がなかなか現れない人もいます。

このくすりを使った場合に、一時的に吐き気を感じたり、血圧が上がったりすることがあります。また、慎重な投与、厳重な分娩監視のもとではほとんど問題はありますが、非常にまれに、子宮の収縮作用が強くなり過ぎる（過強陣痛）ことがあり、子宮や産道が裂けたり（子宮破裂、頸管裂傷）、強すぎる子宮の収縮により、赤ちゃんが低酸素状態になることがあります。

なお、くすりを使っても出産が順調に進まない場合には、帝王切開が必要になることもあります。

産婦人科吉田クリニック
医師

分娩誘発・促進の承諾

私は、分娩誘発・促進の必要性、内容およびそれによって起こり得る危険性などについて理解し、分娩誘発・促進を承諾いたします。

月 日
お名前